

## キューバ見聞記

福島県立福島工業高等学校 定時制 神田 亮

2002年7月29日～8月8日、夏のキューバを11日間旅行する機会を得た。われわれ日本人にとってはまだ身近な存在ではないが、ここ数年、「有機農業」の国としても注目されてきたキューバの最近の様子について以下に書くことにする。

## キューバの農村風景

旧ソ連・東欧との関係の変化により、経済に占めるサトウキビ産業の比重が減ったとはいえ、キューバの農村の典型的な風景にサトウキビ畑は欠かせない。また、国のシンボルともなっている大王ヤシの木も頻繁に目にする。高さ20mほどの大王ヤシの木が密生している場所には、強い陽射しを避けて、農家の母屋がある。カマグエイ市とシエゴデアピラ市とのほぼ中間の「フィンカ」を、予定にはなかったがバスをとめて見せてもらった。「フィンカ」とは、かつてはキューバのサトウキビ専門の農場をさしていたが、経営の多角化が進んだ現在は、農場一般に対して使っているようである。実際、見せてもらった農場でも、バイナップルとキャッサバ

が隣接して植えられていた。ここの地面はレンガ色に赤茶けていて、熱帯・亜熱帯地域に特有の赤色土壌であることがわかる。



キャッサバ

キューバ第二の都市サンティアゴデクバから、ハバナを経由して西部のピナルデルリオ市までバスで移動したが、風景はほとんど変わらなかった。それは、この島が東西に長く、また、島全体が平坦で標高の高い山岳地帯があまりなく、土地利用も栽培される農作物

も、ほとんど同じであるからなのであろう。

## 「フィンカ・ラ・クバーナ」訪問

サンタクララ市から東へ約50kmほど行った島の北岸カイバリエンの町の郊外に、「フィンカ・ラ・クバーナ」(以下、「FLC」)があった。ここで、かつての製糖工場とサトウキビ畑を見学した。

バスを下車してすぐにSL(蒸気機関車)に乗り、そのままかつての製糖工場に向かった。案内してくれたビンセンテさんによると、この工場は1891年に操業を開始し、1999年まで砂糖を生産していた。現在は閉鎖され、数年後には博物館として生まれ変わる予定らしい。キューバでは、サトウキビは乾季に入って1～2か月ほど過ぎた1～3月頃が最も甘さが増し、収穫期となる。そしてこの時期になると、広大な製糖工場の敷地に、収穫したサトウキビを運搬するための貨車を牽引するSLが活躍する。現在、キューバ国内にある約160の工場のうち、70ほどの工場は稼働していない。生産を縮小したり工場が閉鎖されると、サトウキビ畑の周辺は牧場になってしまうらしい。

FLCでは、ココヤシのジュースが振る舞われた後、2頭の牛が引く牛車の荷台に乗ってサトウキビ畑まで移動した。人間の背丈よりも高いサトウキビを切ってもらい口に含むと、甘い汁が口の中一杯に広がった。

かつての農場の労働者が行っていた、大王ヤシの幹を利用した簡単なサトウキビの搾り方も教えてもらった。



大王ヤシの木

サトウキビを搾る

にスルスルと上っていった農場の男性が、実の房をロープを利用して地面にまで下ろしてくれた。大王ヤシの実には「バルミチュエ」といい、比較的小さく、ブタの飼料になるらしい。

### 葉巻製造工場の見学

島の西部、ピナルデルリオ市で、世界的に有名なキューバ特産の葉巻の製造工場を見学した。ピナルデルリオ州はキューバ有数の葉タバコの産地である。残念ながら、工場内の写真撮影はいっさい禁止であった。

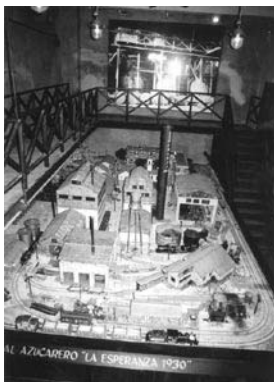
それほど大きくはない工場内では、女性労働者によって手作業で葉巻が作られていた。1枚1枚葉タバコを丸めて、1本1本とても丁寧に仕上げている。生産現場には窓はほとんどなく、また、真夏だというのに扇風機もエアコンもなかった。冷房設備が整っていない理由は、葉巻の材料になる葉タバコが飛ばないようにするというのと、冷房のための機材と電力が不足しているということらしい。

別の部屋では、でき上がった葉巻を束にして、専用の木箱に詰める作業が行われていた。スペイン語・英語・フランス語・ドイツ語で書かれたラベルの最後には、スペイン語で「創業1492年」と記載されていた。

### ラム酒製造工場と博物館

ピナルデルリオ市郊外のラム酒製造工場も見学した。「CASA DEL RON ELVALLE」という工場である。木の樽がたくさん並んでいる熟成の現場を見せてもらった。ラム酒の原料はサトウキビだが、キューバではブラジルなどとは異なり、ホワイトオークの樽に入れて熟成させるので、年月が経過するとともに色が濃くなっていく。文豪A.ヘミングウェイが好んで飲んだ「モヒート」は、ホワイトラムで作る。

代表的なラム酒「ハバナ



ラム酒製造工場のミニチュア

クラブ」の歴史と製造工程、さらにキューバのサトウキビ栽培の歴史を見学するには、ハバナ市内の博物館がよい。1930年の砂糖およびラム酒製造工場のミニチュアが再現しており、サトウキビの収穫の様子を実写フィルムで見ることできる。

### アメリカ合衆国による経済封鎖とモノ不足

キューバは、1902年の独立以後もアメリカ合衆国の支配下に置かれ、1959年のカストロらによるいわゆる「キューバ革命」の成功と1962年の社会主義国家宣言以後は、約40年に及ぶ経済制裁を受けてきた。そのため、食料や医薬品を中心に建設資材や輸送用機械、さらには石油や電力にいたるまで、国民の日常生活において慢性的なモノ不足が続いてきた。

しかし、2000年6月27日、米国下院でキューバへの食料と医薬品の禁輸撤廃を盛り込んだ法案が可決され、2001年12月からは、米国からキューバへの食料輸出が約40年ぶりに再開された。

米国による経済制裁が緩和されたとはいえ、国民が日常生活で必要とする食料は、配給制に基づいて指定された場所で配給を受けているのが現状であり、しかも、毎日かならず配給されるとは限らないようである。

### これからのキューバと日本

キューバは、国家評議会議長のカストロが主導する社会主義の国である。かつては、「米国の喉元に突き刺さったトゲ」などともいわれたが、旧ソ連の崩壊とともに「冷戦」も終焉し、また、経済上の後ろだてとしていたロシアも外交政策を転換したため、キューバの将来には不透明さが残る。高齢となったカストロの後継者問題もある。

観光産業に力を入れた結果、ドイツやカナダ、フランスやスペイン、そして日本からの観光客が最近増えている。経済封鎖を緩和しつつある米国にも新しい動きが見られるようになった現在、キューバに対して多額の債権を持つ日本の果たすべき役割は大きいといわざるを得ない。